

学習障害近縁の障害に関する児童精神医学的研究 —境界知能に関する研究—

(分担研究：学習障害に関する研究)

分担研究者：竹下 研三¹⁾

研究協力者：栗田 廣²⁾，中野 知子³⁾，勝野 薫³⁾

要約：143人の境界知能 ($70 \leq IQ < 85$) を有する子どもの臨床的特徴を検討した。対象児は、DSM-III-Rの第I及びII軸診断により、82人の広汎性発達障害 (PDD) 群、14人の特異的発達障害 (SDD) 群、5人の注意欠陥多動性障害 (ADHD) 群及びそれらの合併のない42人の純型境界知能 (PBIF) 群の4群に別れ、いずれの群でも男子が女子より多かった。PBIFはPDDよりもSDD及びADHDに近縁の状態で、広義の学習障害に含まれるものであり、PBIFの研究は学習障害概念の明確化と対応法の確立に必要である。

見出し語：学習障害，境界知能，広汎性発達障害，注意欠陥多動性障害

緒言：広義の学習障害 (文部省研究協力者会議の定義³⁾) は、読字、書字、計算の能力の特異的発達障害を呈するもの以外に、さまざまな精神発達の障害を呈する状態を含む。そのような状態の一つに、IQが70以上85未満の水準で定義される境界知能がある。

境界知能を有するものの頻度は、IQが正規分布することから理論的には13.6%となり、精神遅滞全体よりもはるかに頻度が高い。これらの子どもの多くは、普通学級に在籍しているが、学習面での困難のために、学習障害を疑われて、専門家を訪れることは少なくない。本研究では、これまでとりあげられることの少なかった境界知能を有する状態に関して、自験臨床データにもとづき検討を行う。

方法：本研究の対象は、2つの発達障害児の専門機関に過去10年間に受診した子どもで、初診時のIQが70以上で85未満のものである。

この対象児をDSM-III-R¹⁾による診断で分類し、IQ (大部分の例は田中ビネーにより、その他はWISC-Rにより測定)、小児自閉症評定尺度東京版 (CARS-TV)²⁾による自閉症候の評価、早期発達里程、脳波異常及びてんかん発作の有無などを比較検討した。

結果：表1に示すように、IQ70以上85未満のものは、全体で143人であり、DSM-III-Rに基づく診断群と人数は、広汎性発達障害 (PDD) 82人、特異的発達障

害 (SDD) 14人、注意欠陥多動性障害 (ADHD) 5人、及びそれらの合併のない純型境界知能 (PBIF) 42人であり、4群すべてで男子が女子より多かった。

表1 診断群と性比

| 診断* | 人数 (%) | | |
|------|------------|-----------|-------------|
| | 男 | 女 | 計 |
| PDD | 73 (89.0) | 9 (11.0) | 82 (100.0) |
| SDD | 10 (71.4) | 4 (28.6) | 14 (100.0) |
| ADHD | 5 (100.0) | 0 (0.0) | 5 (100.0) |
| PBIF | 32 (76.2) | 10 (23.8) | 42 (100.0) |
| 計 | 120 (83.9) | 23 (16.1) | 143 (100.0) |

*PDD, 広汎性発達障害; SDD, 特異的発達障害; ADHD, 注意欠陥多動性障害; PBIF, 純型境界知能。

IQ(SD)は、PBIF群、PDD群、SDD+ADHD群では、各々、77.7(4.0)、76.0(4.2)、75.1(3.7)で3群で有意差があり ($F(2, 140)=3.28, p<0.05$)、PBIF群でSDD+ADHD群よりIQが高い傾向があった (Scheffe's test, $F(2, 140)=2.60, p<0.10$)。

表2に3群でのCARS-TVの15下位項目得点と総得点の比較を示す。“活動性の水準”以外は3群間で

1)鳥取大学医学部脳神経小児科 Tottori University, Dept. Neuropediatrics

2)東京大学医学部精神衛生・看護学教室 Tokyo University, Dept. Mental Health and Nursing

3)練馬区立心身障害者福祉センター Nerima Welfare Center for the Handicapped

有意差があり、PDD群でPBIF群より得点が高く、PBIF群とSDD+ADHD群の間には有意差がなかった。

表2 小児自閉症評定尺度東京版 (CARS-TV) 得点の3診断群での比較

| 項目 | 平均値±SD | | | F |
|-----------|------------------------|-------------------------|-----------------------|------|
| | PBIF (n=33) | PDD (n=71) | SDD+ADHD (n=16) | |
| 1 対人関係 | 1.3±0.4 ^a | 1.8±0.4 ^{a,b} | 1.3±0.5 ^b | 22.0 |
| 2 模倣 | 1.4±0.4 ^a | 1.9±0.4 ^a | 1.6±0.6 | 14.2 |
| 3 情緒 | 1.4±0.4 ^a | 1.8±0.3 ^{a,b} | 1.3±0.4 ^b | 13.4 |
| 4 身体使用 | 1.5±0.4 ^a | 1.8±0.4 ^a | 1.5±0.5 | 4.9 |
| 5 対物関係 | 1.2±0.4 ^a | 1.6±0.4 ^{a,b} | 1.3±0.4 ^b | 15.5 |
| 6 変化/適応 | 1.4±0.4 ^a | 1.9±0.4 ^{a,b} | 1.5±0.5 ^b | 19.8 |
| 7 視覚的反応 | 1.2±0.3 ^a | 1.6±0.4 ^{a,b} | 1.1±0.3 ^b | 24.2 |
| 8 聴覚的反応 | 1.2±0.3 ^a | 1.7±0.4 ^{a,b} | 1.2±0.3 ^b | 27.4 |
| 9 近接受容器 | 1.2±0.3 ^a | 1.5±0.3 ^{a,b} | 1.2±0.3 ^b | 12.1 |
| 10 不安反応 | 1.4±0.3 | 1.6±0.3 | 1.4±0.4 | 3.4 |
| 11 言語的伝達 | 1.9±0.5 ^{a,b} | 2.1±0.4 ^a | 2.3±0.4 ^b | 5.1 |
| 12 非言語的伝達 | 1.6±0.4 ^a | 2.1±0.4 ^{a,b} | 1.7±0.4 ^b | 19.4 |
| 13 活動性水準 | 1.8±0.4 | 1.8±0.4 | 1.8±0.3 | n.s. |
| 14 知的機能 | 1.7±0.3 ^a | 2.1±0.5 ^a | 1.8±0.3 | 6.4 |
| 15 全般的印象 | 1.2±0.3 ^a | 1.7±0.4 ^{a,b} | 1.3±0.4 ^b | 32.4 |
| 総得点 | 21.2±2.8 ^a | 26.8±2.8 ^{a,b} | 22.4±2.8 ^b | 50.4 |

F(2, 117)値はn. s. 以外はすべて有意(p<0.05)。

^{a,b}同じ肩付文字の範囲に有意差あり(p<0.05)。

人物画IQ (69人に施行) は、PBIF群23人 (M=78.1, SD=15.2), PDD群43人 (M=72.2, SD=15.8) 及びSDD+ADHD群3人 (M=80.0, SD=15.8) の3群間で有意差はなかった。

始歩月齢 (120人で確認) は、PBIF群33人 (平均=15.5月, SD=4.4), PDD群71人 (平均=19.5月, SD=9.1) 及びSDD+ADHD群16人 (平均=17.6月, SD=7.5) の3群間で差のある傾向があり (F(2, 117)=3.0, p<0.05), PBIF群でPDD群より遅い傾向があった (Scheffé's test, F(2, 117)=3.01, p<0.10)。始歩月齢 (122人で確認) は、PBIF群34人 (平均=13.6月, SD=2.4), PDD群72人 (平均=13.1月, SD=2.0) 及びSDD+ADHD群16人 (平均=13.8月, SD=2.9) の3群間で有意差はなかった。

脳波検査の施行された96人でのてんかん性脳波異常は、PBIF群 (24例中7例, 29.2%) とPDD群 (61例

中11例, 18.0%) 及びSDD+ADHD群 (11人中2人, 18.2%) に有意差はなかった。てんかん発作の有無が確認された121人でのてんかんの既往は、PBIF群の2名のみであった。熱性痙攣の既往は、PBIF群の3人、PDD群の4人及びSDD+ADHD群の2人に存在した。

考察: 境界知能は、広汎性発達障害に伴うもの、特異的発達障害群及び注意欠陥多動性障害に伴うもの、及びそれらに伴わない純型境界知能の3群に大別される。純型境界知能は、広汎性発達障害よりも特異的発達障害及び注意欠陥多動性障害により近縁の状態と思われる。この純型境界知能は、重篤な行動上の問題がないため、早期からの対応がなされがたいが、学齢以後になって学業不振などで不適応を呈することが少なくない。このような意味で純型境界知能は、広義の学習障害の少なからぬ部分を形成する可能性があり、学習障害概念の明確化と対応法の確立のために、さらなる研究が必要な状態である。

文献

- 1) American Psychiatric Association: Diagnostic and Statistical Manual of Mental Disorders, 3rd ed. Washington, DC, APA, 1987.
- 2) Kurita, H., Miyake, Y. and Katsuno, K.: Reliability and validity of the Childhood Autism Rating Scale Tokyo version (CARS-TV). J. Autism Dev. Disord., 19:389-396, 1989.
- 3) 文部省「学習障害及びこれに類似する学習上の困難を有する児童生徒の指導方法に関する調査研究協力者会議」: 学習障害児等に対する指導について (中間報告), 1995.

Abstract

Hiroshi Kurita, Tomoko Nakano, Kaoru Katsuno
Clinical features of borderline intellectual functioning (BIF) were studied in 143 children with it. According to DSM-III-R diagnoses, they were divided into four groups: 82 with PDD, 14 with specific developmental disorders (SDD), 5 with attention-deficit hyperactivity disorder (ADHD) and 42 with pure BIF (PBIF), which is more close to SDD and ADHD than PDD and is included in learning disorders (LD) in a broad sense. Further studies on PBIF are needed to clarify the concept of LD and improve its treatment.



検索用テキスト OCR(光学的文字認識)ソフト使用

論文の一部ですが、認識率の関係で誤字が含まれる場合があります



要約: 143 人の境界知能(70 IQ<85)を有する子どもの臨床的特徴を検討した。対象児は,DSM-IV-R の第 I 及び II 軸診断により,82 人の広汎性発達障害(PDD)群,14 人の特異的発達障害(SDD)群,5 人の注意欠陥多動性障害(ADHD)群及びそれらの合併のない 42 人の純型境界知能(PBIF)群の 4 群に別れ,いずれの群でも男子が女子より多かった。PBIF は PDD よりも SDD 及び ADHD に近縁の状態で,広義の学習障害に含まれるものであり, PBIF の研究は学習障害概念の明確化と対応法の確立に必要である。